

一行は馬車から荷物を降ろし、御者と別れて街の中へと歩み出した。その頃には雨も上がっていた。

濡れた石畳の小路を行くとすぐに市場が現れる。道沿いに露店が並び、多くの買い物客が行き交っていた。

「さあ、安いよ安いよ！」「今日は特別だからね、勉強させてもらうよ！」「その人、どうだい！今朝獲れだよ！」「この指輪はネイクスの品だよ！滅多に出ないよ」……。

活気に満ちた市場を抜けながら、ノアはしきりにきょろきょろしては瞳を輝かせていた。目に見える光景が新鮮で仕方ないらしい。

そんなノアに気づいたノランが、「この『マーデル・プラッタ』はな、周辺の村に住むやつらが、魚とか肉とか工芸品を持ち寄って売りに来てるんだ。だから賑やかなんだ」「そう……」

続けてリアムが、「賑やかは賑やかだけど、なんだか今日はいつも以上に騒がしいような……」

それからネックが、小路の先に見える大きな時計塔を指差して、「で、俺たちが向かってるのはあそこ。この街の一番高いところにある『シェンティア学園』の分館だ」「しえんていあ学園……」

「あそこは漂着物の研究をしてる学校だ。たくさんの学生がいて、その中のひとりが俺たちの友人なんだ」

「そ。だからそいつにノアのことを聞いてみようって寸法よ」

先に行くノランが振り向いて、「小難しいけど悪いやつじゃねえからよ、きっと力になってくれるぜ。なあ」

「ああ」

ノランの視線を受けて、ネックは頷き、「真面目で信頼できるぜ。頭も切れるしな」

ノアに安心してもらえるよう、優しく微笑みかけた。

と、突然、ぐうううと大きな音が鳴った。

ノアはビックリしながら音の正体を探すとノランが照れながらお腹を^{さす}摩っていた。

「さっき派手に動いたせいで腹減ったぜ」

「たしかに、飯食ってから向かうか」

とネックも同意した。

「せっかくだし差し入れも持ってかない？ 研究であんまりご飯食べられてないって言ってなかったっけ」

「そりゃいいアイデア！」

リアムは小路に出ていた露店のひとつを指差した。

簡易的なテントの屋台にパンが並んでいる。

「じゃあ、あそこにしよ！ ノアも食べる？」

「いいの……？」

「もちろん！」

リアムがノアと歩幅を合わせながらテントへ向かった。

「すっかり仲良しだな、あいつら」

「初めてだからな、同性の友達」

「リアムって面倒見いいよな、俺にももう少し優しくしてくれてもいいと思うけどな」

「はは……充分優しいと思うけど」

ネックとノランが感慨深くリアムとノアの様子を見ていると、「どれにする？」

とリアムが振り向いたので二人も陳列された商品を確認めに行った。